

## 沖縄や伊豆諸島に伝わるしらの神

前田速夫は、古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族のシラ信仰というか観念について、「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）という本を書いた。その著書に基づいて、私は、彼が指摘する『納戸という聖なる空間「シラ」』について論考を加え、[「奥の思想」との関係から納戸「しら」のような聖なる空間は「奥の空間」と呼ぶこととした。](#)

その論考では、納戸「しら」との関係に焦点を当てて「奥の思想」の一部を紹介したが、「奥の思想」の全体については、[山地拠点都市構想（前編）の第3章第1節](#)をご覧ください。「奥の思想」は国土づくりにおいても大事な思想であるというのが私の主張である。「山地拠点都市」では、深山に繋がる「奥」という空間を念頭において宗教軸（祭りの軸）を考えねばならないが、現実には、すでにそういう地域構造が壊れてしまっているので、なかなか難しい問題であるかもしれない。それこそ「知恵」を働かせて、深山に繋がる「奥」という空間というものを何とかつくり出していかなければならないのである。

その国土づくりにおいても大事な「奥の思想」の源流を訪ねていくと、どうも古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族のシラ信仰に辿り着くらしい。前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）を勉強してそう思う。前田速夫は、どうも古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族のシラ信仰については、納戸「しら」のほかに、「沖縄や伊豆諸島に伝わるしらの神」ならびに「立山芦峯寺の布橋灌頂」のことを「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」に書いているが、ここでは「沖縄や伊豆諸島に伝わるしらの神」を以下に紹介することとしたい。

[宮古島の狩俣部落では、旧暦10月から12月までの間に五回、祖神祭（ウヤガン）が行われる。](#)一回の祭りの期間は三日ないし五日間という島最大の年中行事だ。参加者は50歳代から70歳代のウヤガンの資格を有する神女のみ12名。頭にはウプバー木の葉やつる草で作った被り物をかぶり、腰ひだをつけ、手草を持って、聖地のフムイ（大きな森）に籠って、断食を重ね、ニーリ（神歌）を歌い続ける。夏の豊年祭（プーズ）で歌われる、大蛇神が村の祖神であることを告げるシマ建ての歌の冒頭は、次のようなものだ。

天の赤星よ 太陽（てだ）の子真主よ  
シラテ山座る主 大森（フムイ）ん座る主  
山ノフシライよ 青シバノ真主よ

また、冬の祭りで歌われる神謡では、次の詩句が繰り返される。

根島から降りんな シラスから降りんな  
この地に降りてこの宮古に降りて

後者では集落の根っこである根島とシラスとが対語として歌われているが、このシラスは前者の歌のシラテ山に等しく、そこでは大森（フムイ）の対語である。すなわち、祖神の座（いま）す白い聖なる空間、それがシラスであり、シラテ山であった。祭りの最終日、籠りを終え、神事が終わって、神女の身体から祖神が離れる瞬間、失神するものも出るという。

沖縄・久高島の神女が、資格を得るための神事イザイホーは、男の神人たちが西側に、神女たちは東側の「シラタール殿」の前に並ぶ御殿庭が舞台で、カヤとクバの葉で屋根を葺き、まわりを覆い、内部にも敷き詰めた神アシャゲ（神殿）に、井泉で身を清めた白衣に白鉢巻きの八人のナンチュ（初めて神女になる女たち）が、七つ橋を踏んで中に入って籠るところから始まる。シラタールは久高島の祖神の名で、白太郎と漢字表記されるところを見ても、シラ＝白との繋がりとは否定できない。七つ橋は俗なる世界から聖なる世界へ渡るためのもので、シラ山の前に渡される「無明の橋」と酷似している。

伊豆利島では、初正月から七歳の正月まで、女子が誕生して生育する過程の折り目折り目に、シラー様が祀られた。白紙を折り、まゆ型を基調として人体になぞらえたように刻んだもので、正月事に新調した（大間知篤三「利島のモリとオヤコ」）。シラーは、この場合、柳田の言う「育つ」であろうし、ここでもシラは白で表されている。

11月25日の晩、青ヶ島の太里神社で夜を徹して行われるディラホンの祭りは、初めに死んで横たわっていた女面の舎人が、ディラホンディラホンの掛け声とともに次第次第に生き返って元気になり、ついには飛んだり跳ねたりする。死から生への復活である。

こうして見ると、稲の誕生や人間の生育を司る精霊＝シラは、南島や伊豆諸島の神事や祭祀に間違いなく宿っており、言葉だけではなかった。柳田の直感は、はずれていなかったのである。